

やまとの名品 天理図書館



たけひさゆめじ
竹久夢二装訂本

『絵日傘』5の巻
長田幹彦著
玄文社 大正8年刊
縦16cm 横11.5cm

江戸から明治となり、西欧文化の押し寄せる中、本の世界は平積みで扱われていた和装本から、立てて保存する洋装本へと次第に変わって行きました。その中で近代文学の名著の数々は個性的な装訂で登場し、明治末期から大正にかけ、単に表紙だけではなく背・扉・函・文字等々を総合的にデザインし、芸術的美しさを競う本が次々と現れ、近代装訂史の黄金期が訪れます。

この時期、夢二式美人画で一世を風靡した竹久夢二（明治一七年～昭和九年）の装訂家としての一面について、当館本よりご紹介いたします。当館は近代文学の初版本を中心に、様々に変化

したこの時代の書物を多数所蔵しております。

画家であり詩人でもある夢二の初の著作『夢二画集―春の巻』（洛陽堂・明治四二年）が彼自身の装訂により出版されるや否や、日本中に夢二旋風を巻き起こす大ヒットとなりました。女性画を中心に



『夢二画集―春の巻』
扉絵（明治44年9版）

童画・風景画・詩等で構成され、絵から溢れだす抒情や郷愁が人々の心を捉えました。

夢二は画壇に属さず独自のスタイルを確立し、五〇数冊の著自装本の他、依頼された書籍装訂は二五〇冊以上、また三百点を超す楽譜表紙をデザインし、その他各種雑誌の表紙や挿絵等、夢二の絵を見ない日はないと言われる程、出版界を中心に活躍し、数々の傑作を残しました。

前掲写真は夢二の木版装訂による小説『絵日傘』五の巻（長田幹彦著・玄文社・大正八年）初版の表紙です。夢二は様々な女性美を描きましたが、ここではお辞儀姿の美しさを、情感豊かに表現しました。背・扉絵・口絵の絵柄も小説の舞台である祇園の風情を伝えています。

グラフィックデザイナーの先駆けとも称される夢二は、近代装訂史にその名を残しています。

（天理図書館 多田裕子）